2016 年度　白梅学園大学大学院博士課程　学位審査報告書

学籍番号：B4H002
氏名：本山方子
学位論文題：学校教育における学習の生成と自己言及性に関するフィールド研究
論文審査委員：　（主査）髙田　文子
（副査）無藤　隆
汐見　稔幸
尾見　康博

１．論文内容の要旨

本論文は、フィールド調査に基づき、学校の教育実践における学習について、活動自体の形成と、活動の自己言及的システムとの相克として捉え、学習はいかに「生成」されるのか、明らかにすることである。学校教育の実践においては、当事者にとって「学習」は多義的である。そこで、本論文では、社会文化的アプローチが貢献する学習の形成過程の解明では、学校現場の学習を理論的に説明することには不十分であることを問題とし、学習が自己産出し続けるシステム的側面の解明を行い､学習の生成の議論を行うこととした。本論文では、主体は実践や活動を現出し、それに没入しつつ、その現出を可能にするシステムを産出していることを含めて、「学習」と捉えている。二つには、実践や活動の形成と、維持･継続のシステムを包括的に捉えるため、システムは自己産出されると捉えると、学校教育の実践や活動のシステムはいかに記述できるだろうか。子どもや教師は主体として活動するだけでなく、活動の意味をみいだし、みいだされる存在でもある。フィールド観察を行う調査者の存在にも着目して、学習というシステムの複雑性の縮減における、フィールド調査者の機能を含めて論じることとした。これらの課題に応えるために、本論文では、「学習」を、為されていない状態から価値あることが為されるに至る形成的な側面と、それが学校という場において自己産出する社会システムとしての側面との相克として捉える。本研究の最たる目的は、学習の形成には自己産出システムが埋め込まれており、同時に、学習の自己産出システムはその形成作用において可視化され、どちらも成り立つものとして「学習」を捉え、この事態を総称して「生成」と呼びうることを明らかにしている。本研究においては、調査手法として、エスノグラフィを採用した。教育実践に関する５本のエスノグラフィによる各論である。すなわち、第一に、教育実践における学習とは、フィールドの固有性に応じて表れ、アーティファクトに媒介され、社会文化的に形成される活動として記述可能であった。第二に、その活動システムは、自己言及性を有し、複雑性を縮減しながら自己産出することで、継続を可能としていた。学習の自己言及性とは、一つには当事者自身による「学習」のフレーミング、二つにはシステム内部の自己産出現象、三つには観察され意味づけられみいだされる作用にみられた。すなわち、活動システム内部の矛盾や差異、不安定性が活動の変化の源となり、活動の複雑性が縮減される。そうした事象は、観察され意味づけられることによって、「学習」としてみいだされた。

第三に、したがって、学校の教育実践における「学習」は、社会文化的に形成され発達的に変容する活動と、その活動への自己言及的システムとの相克的事象である。これをもって、学習が生成されるとする。

２．論文審査結果の要旨

第 1 回目の審査会は、2016 年 11 月 8 日 18 時から開かれた。多くの研究を積み上げた意欲的論文であり、教室での多様な出来事を「学習」が何重にも特徴付けられて成立する過程をヴィゴツキー論・社会文化論やオートポイエーシス論の整理などを通して理論化しており、意義深いものであると評価された。だが、多くの不明点があるとされた。特に、理論枠組みとしてのルーマンの整理が未消化である。また、その例えば”ダブル・コンティンジェンシー”の概念などは社会的な見知らぬ関係のあり方であって、実際の教室に適用できるものだろうか。全体総括（第 3 部）は消化不良の感じがある。なお、議論が荒っぽい。実際の研究の発見に即して、各々のフィールドワークの知見をコンパクトにまとめ、それらを総合するとよい。以上の修正を行うことで、第二回目の審査会に進むことが了解された。

第二回目の審査会は、2017 年 1 月 16 日 19 時から開かれた。第 1 回目の審査で指摘され、求められていた多くの修正点を適切に修正し、分かりやすい論文となり、その意義が明瞭になったと高く評価された。特に、いくつもの学校の授業場面を事例として取り上げ、そこに 3 つの理論的観点から検討を加えた。第一は、アーティファクト（人工物）や道具により学習活動が媒介され、形成されていくということである。第二は、学習のとらえ方のリフレーミング（枠組みの見直しと再編成）が生じることを通して活動の場の複雑性を縮減し、その場なりの学習としての活動が成り立つことである。第三は、フィールド調査者の観察システムが教師自身に観察システムに取り込まれま教師のそれを取り入れることを通して活動が学習として自覚的に成り立つことである。それらの理論的視点がいくつもの事例で試され、その都度の詳細な分析を進める枠組みとして機能するとともに、現象の整理に役立つことが示された。審査においては、なお、理論的な整備に分かりにくさがあること、理論的な進展が事例の検討を通してどのようになされたかを明示すること、ルーマンによる理論体験を限定的にこの論文で用いることを明確にすること、従来の授業や部活動の検討と異なる分析であることをもっと明確にすることなどが求められた。そういった修正を行った上で、公開審査会に進むことが了承された。

第三回目の公開審査会は、2017 年 2 月 17 日 19 時 15 分～に開かれた。第 2 回目の修正要求を適切に修正し、発表を行った。質疑として、実践的意義や理論的説明が問われ、適切に答えた。審査委員からは、学習の二側面を区別して関連づけている。「形成」は静的記述であり、自己言及システムはシステムの動的自己運動である。学校というシステムにおいて二つが相克しているという指摘は興味深いが、より明確な記述がほしい。外部からの調査者の観測と関わりがそこで必要となるのではないか。活動における自己の変容を形成としてとらえるならそれは事実自体であるが、それを社会的に学習ととらえると、社会的な規定に終わる。両者をつなぎ、個々の学習者の目的的意図的な学習を超えて、システム内部の生成としてとらえることと、外部からの規定が学習をさらなる高度で変容する規定としていくとする点がオリジナルである。外部からはおそらく研究を踏まえた調査者の

視点と制度に基づく規制などが働き、内部者としての教師はそれを受け継ぐ働きもなす。さらに、子どもが次の場のシステムにそれまでの学習のあり方を落とし込むあたりに学校を超えていく分析が見られる、といった指摘がなされた。最終試験では学力の確認を含め、それまでの修正が適切になされ、公開審査での質問に的確に答えたことが認められ、博士論文として合格と判定した。